

## 平成29年度 全国高等学校総合体育大会（南東北総体） 大会総評

報告者：高体連技術委員 越ヶ谷高校 野木 悟志

平成29年7月28日～8月4日に宮城県で開催された全国高等学校総合体育大会に本県から昌平高校と浦和西高校が出場した。昨年度の全国高校総体で第3位の昌平高校は、今大会の優勝候補の一つとして挙げられ、注目度が高かった。シード校として2回戦で日大藤沢高校（神奈川県第2代表）と対戦し、1-2で惜しくも敗れた。30年ぶりの全国高校総体出場となった浦和西高校は、1回戦で地元の東北学院高校（宮城県第2代表）に2-1で勝利、2回戦は京都橘高校（京都府代表）に0-5で敗れた。残念ながら両校ともに2回戦敗退という結果になったが、本県代表としてのプライドを持ち全力で戦ってくれた両校の健闘を称えたい。

昌平は、2回戦日大藤沢と対戦した。試合序盤は昌平がボールを保持し、ペースを掴む。GKとCBで丁寧にパスを繋ぎながらボランチがタイミング良くボールを引き出し、前線の選手へパスを配給し攻撃を仕掛ける。昌平がボールを保持する時間が続くが、日大藤沢の守備の意識が高く、ゴール前で的人数をかけた厚みのある守備の前にバイタルエリアやペナルティエリアになかなか侵入できない。しかし、昌平は32分一瞬のマークの隙をついたFW⑨佐相が振り向きざまにシュートを打ち、先制点を奪う。守備では日大藤沢のFWに対し、CB④石井とCB⑥関根がしっかりマークし自由にプレーをさせない。1-0のまま前半終了。後半になると、同点に追いつきたい日大藤沢が前半よりも高い位置から積極的にプレスをかけ始めてきたことで、昌平は自陣でボールを奪われるシーンが次第に多くなっていく。さらに、日大藤沢の選手交代で攻撃の活性が増し、徐々に押し込まれる時間帯が長くなる。攻撃はFW⑨佐相へのロングボールが増え、本来の攻撃的なポゼッションサッカーが展開できず、リズムを掴めない。それでも守備陣がなんとか体を張って得点を許さずにいたが、58分に日大藤沢の右サイドからのクロスがFWに渡り、一瞬プレスが遅れたところを決められ同点に追いつかれる。直後の59分、左サイドのクロスからOGで失点し、日大藤沢に1-2と逆転を許してしまう。その後昌平が猛攻を仕掛けるが、日大藤沢の粘り強い守備の前に得点を奪えず1-2のまま試合終了となった。

今大会準優勝の日大藤沢に対しボール支配率では上回り、どちらに軍配が上がってもおかしくない試合展開であっただけに、昌平の2回戦敗退は残念な結果であった。今大会での経験を糧にさらなる飛躍を期待したい。

浦和西は、1回戦東北学院と対戦した。試合序盤、浦和西は守備に重点を置き2トップを残し引いて守り、奪ったらロングボールをFW⑩高橋に集め、シンプルに攻撃を展開する。東北学院のサイドを起点とする攻撃に対し、引いて守る時間が長くなる浦和西は奪ったボールをFW⑩高橋とFW⑩遠藤に素早くロングボールを入れ、カウンター狙いの攻撃が続く。FW⑩遠藤のところでボールをキープするとゴール前に迫るようになるが、得点には結びつかない。両チームともに得点を奪えず、0-0のまま前半終了。後半、浦和西は東北学院の

守備の一瞬の隙をつき、スローインからMF⑧楮本のクロスにMF⑭加藤がヘディングで合わせ先取点を奪う。その後、同点に追いつこうと攻撃に出る東北学院のスペースをうまく使い、浦和西がボールを保持する時間が長くなり、ゴールに迫る回数が増えていく。するとCKのこぼれ球を浦和西が押し込み、2-0とリードを広げる。試合終盤に東北学院に1点を返されたが、2-1で勝利し2回戦進出を決めた。

2回戦は、京都橘と対戦した。試合序盤、DFラインからのポゼッションで攻撃を組み立てる京都橘に対し、浦和西はボールを奪うタイミングを窺いながら慎重な姿勢で試合に入る。しかし、スピードアップのタイミングを逃さず攻めてくる京都橘に14分、15分と立て続けに失点を喫し、試合の主導権を握られる。1点を返して雰囲気を変えたい浦和西は、京都橘の右サイドの守備の連係不足を突き、押し込むもののシュートまで至らない。0-2とリードを許したまま試合を折り返す。浦和西は、FW⑩高橋、右サイドでのドリブル突破とロングスローが期待できるMF⑬田村を後半立ち上がりから投入して状況の打開を図る。このことにより、攻撃が活性化した浦和西のシュートは増えたが、京都橘GKの好セーブに得点を阻まれる。これ以上の失点を避けたい浦和西であったが、ボールを奪っては効果的にゴール前にボールを運んでくる京都橘に3点追加され、苦しい展開となった。その後、浦和西は2トップを起点に果敢にゴールを目指そうとするが、京都橘の堅い守備の前になかなか攻撃の形を作らせてもらえずに0-5で敗れた。

残念ながら2回戦敗退となった浦和西であったが、全国の舞台で1勝できたこと、そして敗れはしたものの全国屈指の強豪校である京都橘と真剣勝負の場で戦えたことは今後のチームの成長につながるであろう。

大会全般を振り返ると、関東勢がベスト4（流通経済大柏、日大藤沢、前橋育英、市立船橋）を独占するなど関東勢の活躍が目立った大会となった。その4チームの共通点は失点が非常に少ないという点である。4チームとも1試合の中で2点以上失点した試合は、大会を通じて1試合もなかった。優勝した流通経済大柏に限っては、5試合でわずか1失点のみであった。チームとしての守備の戦術が徹底されていることは当然のことながら、個の守備意識と守備能力が非常に高いと感じた。特に「デュエル（球際の戦い）」はレベルが高い試合になればなるほど、より激しさを増していった。また、「バイタルエリアの守備」の質も全国上位チームになると高いものがあつた。ボールホルダーへ激しくプレスをかけることでバイタルエリアに簡単に侵入させないこと、そして侵入されたとしてもボランチとCBでしっかり対応することで相手選手に自由にプレーをさせないことが徹底されていた。埼玉県チームが全国大会で好成績を残すためには「デュエル」と「バイタルエリアの守備」を磨いていくことが必要であると感じた。攻撃では、前線にスピードのある選手や高さのある選手、フィジカルの高い選手など特徴的な選手を配置し、そこへロングボールを配給し攻撃を展開するチームが多かった。全国高校総体は、試合時間70分と短いことに加え、トーナメント方式で実施される。そのため各チームがリスクを負わず、奪ったボールをシンプルに縦に速く攻撃を仕掛けて得点を奪うシーンが多く見られた。しかしその反面、ロングボールが多くなる

ことで単調な攻めとなり簡単にボールを失ってしまうシーンもまた多かった。パスワークや連動した動きで相手守備陣を完全に崩して奪った得点シーンは少なく、「アタッキングサードの崩し」はどのチームにも共通する課題であったと言える。個とチームの守備力が高まってきた中でどのように相手守備陣を崩し得点を奪っていくのか、今後の各チームの攻撃面での工夫に注目していきたい。

夏の全国高校総体が終わり、次の全国の舞台は冬の選手権大会である。選手権大会において埼玉県チームが全国優勝を果たすためにも県予選でのハイレベルな戦いが数多く繰り広げられることを期待する。